ミニシンポジウム記録 若手が拓く水産学研究：国際舞台で活躍する若手研究者たち

6. 北極海の動物プランクトン・仔稚魚群集に関する在外研究 (カナダ・ラバル大学)

鈴木啓太

京都大学フィールド科学教育研究センター

6. My experience at Laval University (Canada):
ecological studies on zooplankton and fish communities
in the Arctic Ocean

KEITA SUZUKI

Field Science Education and Research Center, Kyoto
University, Maizuru, Kyoto 625-0086, Japan

1. きっかけ

2009年12月、学位取得後の身の振り方を考えていた私にカナダ人の友人からメールが届いた。前月、彼は日本でのポスドク生活を終えカナダに帰国していた。「2年契約のポスドクを探している。北極海の動物プランクトンと仔稚魚を研究する気はないか？」私は海外武者修行をする絶好の機会と思い、仕事や契約の内容を確認するなど具体的に話を進めた。2010年6月、双方の準備が整い、私は単身渡航した。カナダ到着直後、友人宅で30歳の誕生日を迎え、現地採用ポスドクとしての生活が始まった。

2. 経験

私はラバル大学理工学部にも所属し、北極海の動物プランクトン・仔稚魚群集の経年変化と海氷減少の関係を分析した。ボスはカナダ最大規模の学際的研究グループArcticNetの指導者を務めていた。ArcticNetはカナダ沿岸警備隊の砕氷船を使用し、数か月に及ぶ北極海調査航海を毎年実施していた。

私はチャーター機でイヌイット村に降り立ち、ヘリコプターで砕氷船に移り、夏の北極海で数週間を過ごした。シロクマやオーロラには遭遇できなかったが、白夜の下で北極海固有のカイアシ類や魚類を採集し、北極海の神秘を垣間見ることができた。また、大規模研究グループの一員として働くことの楽しさと難しさを学ぶこともできた。異なる分野の研究者と意見を交換し、多面的に検討を重ねることは有意義であった。一方、大勢の研究者が関わっていたため、調査や分析を進めるには様

々な制約が存在した。少人数で調査し、個人的に分析することに慣れていた私には全てが新鮮な経験であった。

3. 苦労

雇用状態は常に不安定であった。2年契約は口約束であり、数か月ごとに契約を更新しなければならなかった。ArcticNetの大口スポンサーは北極海の海底資源開発を目論む石油メジャーであったため、メキシコ湾原油流出事故の影響などによりArcticNetは資金繰りに困っていた。私は現状を脱するため、州政府が主催する奨学金に応募し、選考を潜り抜け、2年目は奨学金で安定して暮らすことになった。しかし、3年目は数か月ごとに契約を更新する生活に逆戻りした。ArcticNetの資金繰りが悪化すれば、私は研究成果の如何によらず、解雇されてしまう状況にあった。

ラバル大学があるケベック州はフランス語圏であり、英語だけでは不便なため、私はフランス語を勉強する必要があった。結局、会話はほとんど身につかなかったが、読書をいづらか身につけることができた。日常的なメール交換ばかりでなく、アパートの家賃交渉がもつれて簡易裁判所に呼び出される事態に陥った際にも役立った。

私が住んでいたケベック市は宗谷岬よりも高緯度に位置し、11～4月の半年間は冬であった。私は寒く長い冬を楽しく乗り切るため、平日は地元の柔道クラブに通い、週末は近郊のスキー場に出掛けた。身体を適度に動かすこと、また、スポーツを通し友好関係を深めることにより心身の健康を保っていた。

4. まとめ

2013年3月、私は現職に就くため日本に帰国した。約3年間の在外研究を通し顕著な業績を残したり、強力な人脈を築いたりすることはできなかった。しかし、言葉も満通に通じない異国において様々な経験を積み、奮闘を重ねたことにより度胸をつけることができた。また、人との出会いや異文化との接触により世界観を広げることができた。海外武者修行を通し私は人間として確実に成長することができたと思う。治安がよく偏見の少ないケベック市であったからこそ私は何事にも積極的に挑戦することができた。平和で寛容な心をもつケベック市在住の友人達に深く感謝している。